ＫＳＫＳ（ＦＲＥＥＤＯＭ　No74）第三種郵便物認可　通巻2635号　2008年5月21日発行

KSKS FREEDOM

薬物依存症からの回復支援

フリーダムニュース
NO.74
年間購読料２０００円
編集
フリーダム
06-6320-1463

写真：倉田めば

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物認可　毎日発行

CONTENTS

■生活保護、通院交通費の支給に制限
　フリーダム、大阪ダルクが声明
■セミナー報告「累犯障害者と累犯薬物依存者」
■アンダーソンの物語　ＰＡＲＴ９
■ダルクのなかま　　まさし

病院に通えない？

生活保護、通院交通費の支給制限

厚労省が新方針

厚労省は４月１日付の通知「『生活保護法による医療扶助運営要領について』の一部改正について（通知）」で、移送費（受診の際の交通費）の支給方針を「改正」することを示しました。その理由として「先般、多額の不正受給事件が発生するなど不正受給が疑われる事案や過大給付と思われる事案等も見受けられたこと」「各自治体によって取り扱いが様々であった」ことをあげています。そして、４月から６月までの三ヶ月間を「是正期間」とし移送費の支給を見直すように求めています。

通知では、「例外的に」次の場合は移送費を支給しても差し支えないとしました。

（ア）身体障害等により、電車・バス等の利用が著しく困難な者であって、当該者が最寄の医療機関に受診する際の交通費が必要な場合

（イ）へき地等により、最寄の医療機関に電車・バス等により受診する場合であっても当該受診に関わる交通費が高額になる場合

（ウ）検診命令により検診を受ける際に交通費が必要になる場合

（エ）医師の往診等に係る交通費または燃料費が必要になる場合

しかし、支給にあたっては「受診する医療機関については、原則として福祉事務所管内の医療機関に限るものであること」と範囲を限定しているのです。

この通知は、滝川市の事件等一部の不適正な事例を口実にこれまで受診の際に支給されていた「移送費」を「例外的」なものとし、制限を加えていこうとするものです。特に「受診する医療機関については、原則として福祉事務所管内の医療機関に限るものであること」と限定をすることで、薬物依存をはじめとする専門医療へのアクセスを断ち切る危険をもっています。

また厚労省は「生活扶助には一定の交通費も含まれている」と主張し、「当該受診に関わる交通費が高額になる場合」とことさらに「高額」である場合だけを支給対象にしようとしていることにも注意が必要です。「高額ではない」と判断されたら、これまでは支給されていた移送費が出なくなってしまうのです。限られた保護費の中から通院交通費を捻出することは、たとえ小額であっても生活を圧迫しひいては通院の中断を招きかねません。

すでに「四月からは通院交通費が出ませんよ」と担当ワーカーから言われた薬物依存の仲間がおり不安が広がっています。また、今回の改定では対象になっていない自助グループへの参加交通費（生活扶助の移送費）についても「出せなくなくった」と説明を受けた人がいました。これはあきらかに間違いなのですが、しかし「生活扶助に一定の交通費も含まれている」という厚労省の言い分からすれば、今後、生活扶助の移送費にも波及しかねないと危惧されます。フリーダム、大阪ダルクでは「声明」を出すとともに、諸団体と連携しながら、この問題に取り組んでいきます。

フリーダム常任理事　谷口伊三美

生活保護、通院移送費に関する声明

厚生労働省は、平成20年度において、北海道滝川市の暴力団による通院費用の不正請求などを口実に、「通院移送費等の適正化対策」をおこなうとしています。移送費の給付を国民健康保険と同等の扱いにし、災害現場からの緊急輸送、離島から医療機関への搬送などの緊急の場合に支給を限定、身体障害者などで電車・バスの利用が著しく困難など例外的な場合、へき地などで電車・バス代が著しく高額になる場合に限り「例外的」に支給するとしています。また、移送費を支給する医療機関は、原則として福祉事務所管内（同じ市区郡内）としています。

私たちは、薬物依存症に苦しむ方たちの回復支援に携わっていますが、今回の「通院移送費」の支給基準改定は看過できない、大きな問題を持っていると考えます。

まず指摘しなければならないことは、薬物依存症の治療に必要な専門プログラムをもつ医療機関は全国に数えるほどしかなく、ほとんどの福祉事務所の管内には専門治療施設が存在しないという実態があることです。管内どころか県内に一箇所も専門医療機関がない、というところさえ珍しくありません。移送費の支給を「原則として福祉事務所管内」に限ることは薬物依存症に苦しむ人たちから治療へのアクセスの権利を奪ってしまうことにつながります。

また、「交通費が高額になる場合にのみ支給」とする方針のようですが、私たちは「高額」であるかどうかに関わらず、通院移送費が従前のようにすべて支給されるべきだと考えます。「依存症は否認の病」とも言われ、自らの病気を認め治療を継続することが困難な病です。わずかであったとしても生活保護費の中からの通院交通費の負担は、依存症者の治療への気持ちを減少させ、治療の場から遠ざけてしまう役割を果たしかねません。

以上より、平成20年度における通院移送費の支給基準の改定を見直し、従前どおりの取り扱いとされることを厚生労働省ならびに各自治体に強く要望するものです。

薬物依存症は回復が可能な病です。しかし、回復のためには適切な治療や支援が不可欠です。薬物依存からの「回復の権利」を保障し、薬物依存者にも生きる希望の持てる社会であってほしいと思います。

2008/4/11

特定非営利活動法人　大阪ダルク・アソシェーション
～薬物依存症からの回復支援～フリーダム

フリーダムセミナー13

「累犯障害者と累犯薬物依存者」

「弱い人は神様からたくさんの支援を受けるように定められている」（近藤恒夫）

「行政・保護・福祉がうまくつながっていければ・・・と思います」（矯正施設関係者）

[redacted]　フリーダム　正木恵子

今、司法と福祉の現場に何が起きているのか

本来、知的障害をはじめとする様々なハンディを抱えた方や、重症の薬物依存症者については、医療的あるいは福祉的なサポートこそが必要である。しかし、現実には、福祉や医療のネットには脆弱な部分も多く、そこからこぼれ落ちてしまった方が、最終的に司法のネットでフォローされている現実がある。

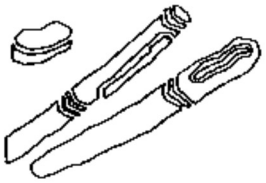
ハンディのある方もない方も共に生きる社会を目指す「ソーシャルインクルージョン」（社会的包摂）の思想が福祉の分野に取り入れられようとしているが、罪を犯した障害者や薬物依存症と生きづらさを抱えた方に対する社会の眼差しは依然として厳しい。今、司法と福祉の現場に何が起きているのか明らかにし、司法と福祉のよりよい連携はなしうるのか。このシンポジウムはこうした観点から企画された。

当事者の声に耳を傾けることの重要性

企画に当たって一番重視したのが、当事者の声に耳を傾けるということであった。当事者の「語り」のなかには、援助専門職等当事者ではない者が見落としてきた多くの回復への希望が散りばめられていることを、我々はダルクやフリーダムの活動のなかで常に学んできた。そこで今般、自らの受刑経験を契機に、司法と福祉との連携について活発な発信を続けておられる山本譲司氏、薬物依存症からの回復施設ダルクを日本で最初に立ち上げ、現在も社会内、そして刑務所内の依存症者の回復に奔走されておられる日本ダルク本部代表近藤恒夫氏、そして４度目の受刑生活で回復への端緒を掴み、フリーダムボランティアスタッフを経て京都ダルクのスタッフである阪本高司氏にシンポジストをお願いすることにした。

幅広い分野から集まった参加者

幸いにして新聞等で多く取り上げられ、当日は遠方は福井や徳島県から、合計２３６名の参加があった。当事者や家族のほか、医療・行政・更生保護官署職員や保護司・矯正施設職員・司法関係者・教育関係者・作業所等の福祉関係のスタッフなど、これまでのセミナーに比べかなり幅広い分野からの参加があったことも今回の特徴である。フリーダムセミナーに初めて足を運んで下さった方も少なくなく、薬物依存症への回復支援に対する理解の裾野の広がりが期待できた。



地に足のついた議論と前向きな提言

山本氏は、ご自身の経験を元に、福祉のネットからこぼれ落ちた多くの障害者が刑事施設に収容されている現実を、黒羽刑務所養護工場のＶＴＲの紹介も交えて、具体的に説明された。刑事施設内のハード（設備）ソフト（処遇）面双方での充実は無論のこと、釈放後の生活をいかにして支えるかという観点から、矯正と更生保護との連携の重要性について強調された。受刑者の処遇には１人当たり年間３００万円の税金が必要とされており、この税金をもっと有効に使う方法があるのではないかと言及された。

近藤氏は、ダルクにつながる者の多くは、帰住予定地や引受人が整っている仮釈放者ではなく、頼りになる人も行き場もうしなった満期釈放者である現実に言及され、回復を支える生活基盤の整備の重要性について強調された。「弱い人は神様からたくさんの支援を受けるように定められている。」という主張には、累犯薬物依存者を「薬物をやめる意思がない者」と排除する人々への、穏やかだが確固たる反論として、会場の共感を呼んだ。

阪本氏は、４回目の受刑の際、自ら独居を希望し、それまで十分につながりきれなかったダルクにしっかりとつながった端緒について飾らない言葉で語られた。

高まる共感　アンケートより

今回のセミナーの特徴は、アンケートの回収率が非常に高く、多彩な意見が記載されていたことである。その一部をここに紹介する。

★山本譲司さんの「獄窓記」を読んで、お話をきいてみたいと思い参加しました。私自身の関心は障害者でしたが、犯罪を繰り返すことを社会がどう考えていくべきなのか、非常に勉強になりました。犯罪被害者の人権が新たな人権として光があてられるようになった様に、累犯者を社会がどう受け入れていくかを考えていくことも犯罪のない社会を築くことにつながると思いました。ありがとうございました。

（中学社会科教諭）

★今日は有難うございました。今日の色々なお話をうかがってふだんのことに重ね、問題の二重構造をつくづく感じました。というのは、当人の抱える問題（生育歴、受刑歴、社会不適応、etc）＋社会側の中途半端な対応、無理解であり、この後者が特に重いと感じています。また私自身はふだんホームレス状態の方々の対応をしていますが、その若年化、メンタル的問題を抱える人の増加、生きづらさを抱える人々が増えているのを感じており、生保、医療のみでは対応しきれてないと実感してい

ます。プラスそういった人が、いわゆる野宿スキル（野宿でも生きていけるという体験）をしてしまうと、社会生活の中で、ストレスを感じると再野宿になるケースが多いので、まず刑務所や家庭、病院であっても、実際ホームレス状態の人は多いと思うので、その段階で支援につながることを望み、そういうことに携われるスタッフになりたいと思いました。

（野宿生活者巡回相談室スタッフ）

★薬物に関する依存者の心理、障害者の依存制について国がもっと力を入れ出所後のケア・矯正に対して社会問題として行政が取り組まれる事が大事だと言う事がわかりました。

（薬物乱用防止教育関係者）

★数年前の池田小学校で多くの児童を殺傷した事件があり、勿論犯人は許せない。でも彼の父親が取材を受けた時の態度や社会に溶け込めず孤立し、孤独の中で絶望していた状態が窺え、誰か一人でも彼に寄り添っていたら、ここ迄の事件にならなかったと思いました。私は民生委員でしたがそんな場合どんな力になれるかと思うと何も出来ないと思い知りました。本当に塀の外で「自由」を満喫している私達の問題だと思います。

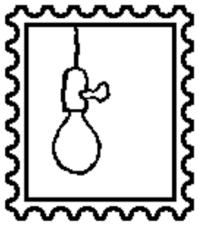
（その他行政関係者、元・民生委員）

★当事者の方の意見を聞けた事によって、こちらが良いと思っている事も当事者の方にとっては、一方的なモノなのだと思いました。有難うございました。

（学生）

★私自身は、十年近く売春を仕事としてきて、売春をする女性や外国人のための自助グループの可能性について活動もしていました。一方で、売春の客としてム所帰りの人、薬物を使う人、障害のある人、またいわゆる日雇い労働者などの男性と多く出会ってきました。彼らの中には、私たちに対して「社会の底へン」としての共感や、私たちに対する感謝を持つ人が少なからず居て、私たちを大切に扱ってくれました。このことはとても複雑なことだと思いますが、そのような経験から、今回のセミナーに関心を持ちました。今、感じていることは、女性も大変だが、男性も大変だし、それは性別を越えた大変さであると。※しかし、男性の大変さの「しわ寄せ」を引き受けているのは、いろんな意味でやはり「女性」である場合が、いぜんとして多いと思います。「男女」という二項対立ではなく、ジェンダーであれ何であれ「弱者」がしわ寄せを引き受けざるを得ないという構造に対して、草の根的に今後もとりくんでいきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。また、今日の三人のシンポジストの方々のお話の内容の充実さもさることながら、来場者の興心の多様さと高さに、それと、司会の方の落ち着いた進行に、近藤さんのお話には何度も泣きそうになりました。阪本さんはファンになりました。山本さんは、早速著書を読みたいと思います。（その他福祉関係者）

★障害者と犯罪者は、誰でもなる可能性があります。しかし、多くの人は、それが、全然わかっていないように見えます。今の日本は、障害者、犯罪者になったら人生は終わりです。職場、地域、社会から排除された上、下等な人間、危険な人間として蔑視され生活をおびやかされながら、元受刑者、障害者の人は、生きているというのが現状ではいでしょうか。仕事と衣食住、等の生活手段を保障する事が累犯者を減らす事になるのではないでしょうか。被害者支援ということがマスコミなどで、さかんに主張されていますが、罪を



反省し、更生しようとする、元・加害者の人にたいしても、支援が必要ではないでしょうか。私自身も障害者（難聴者）です。

（障害者福祉関係者・難聴障害者）

★「人は変わることができる。」というメッセージを強く受けました。変わることができるのは、その人自身の力でのみで、他の人が変えることはできないのだと思います。けれど、本人の力のみで、その人の生活までを抱えられないとしたら、周囲の人が、関わることも必要であるし、関わらない人も変わる必要があるのではないかと思います。人に誉められたことのない人と接することが多くあります。笑顔の無かった人が、笑顔を見せるようになったとき、私はその人から大きな快感をもらいます。ただ自分の無力さを感じることの方がずい分多いですが、この仕事やめられませんね。でも、人に関わることによって、自分自身の問題と向き合うことを避けている気がすることも、しばしばです。

（障害者福祉関係者・P.S.W）

★「自分の失敗を笑えるようになった時に回復を感じる」と言われた近藤さんの話に深いものを感じました。（当事者の家族）

★薬物にはとりあえず関係ないが犯罪者になってしまった知的障害者を、だれが、どこで、どのように、サポートできるか？特に「自分は知的障害者ではない」と考える人たちや生活力（一定の社会のおよぎ方を身につけた者）のある人は「支援なんかいらん」と考えていることが多いのでなやむところです。特に家族のサポートのうすい人、もっというと悪い人間関係にこじれている人が更生につながるしくみが必要だと思っています。

（知的障害者の学校・高等部）

矯正・更生保護官署職員からも大きな反響！

シンポジストから「矯正福祉」への提言がなされたことに対して、参加者の約１割を占めた矯正施設職員、更生保護官署職員、保護司からも前向きな意見が寄せられた。

★テーマについて、実情を知り、大変勉強になった一方で、弱い人は神様から沢山支援を受けられるのだという近藤さんの言葉や、回復するということについて改めて考えさせられ、テーマに限らない社会全体へかえって視点が広がったように感じます。

（更生保護官署職員）

★・講演者は、三人ともわかりやすい説明で良かった。

満期出所者の受け皿の必要性を痛感した。（累犯障害者、累犯薬物依存者ともに）

（更生保護官署職員）

★保護司をしていて、何の支援もできない満期出所者のことが一番気になっていたし、何か支援する手段はないかと悩んでいたが今日のお話を聴いて満期出所者への何等かの支援の必要性を痛感した。阪本さんの話を聴いて対象者との面談に活かせる部分が多くあった。

（保護司）

★非常に興味深い内容だったと思います。高齢化、福祉施設化が進むといわれる矯正施設ですが、本来の目的とは違う訳で不十分な状態です。「矯正福祉」というものが必要と思います。セーフティネットからこぼれた人達をどのようにフォローしていくかも社会全体で考えていかなければならない問題と感じました。

（矯正施設関係者）

★近藤さんはじめ皆さんの話から、すばらしい提言を感じました。私たちができることは積極的にしたい。面会に訪れる家族へのアプローチを、まずはじめようと思います。

（矯正施設関係者）

★受刑者の中に障害者が多いことは、知ってはいたが普通の仕事では、出会うことが少ない。それには理由があるということが分かった。

（更生保護官署職員）

★今回のセミナーで矯正に福祉の介入が必要だと考えている人がいるということが分かり、矯正施設で勤務している者として心強く思いました。矯正福祉が必要だという声が大きくなり、実現されることを願っています。

（矯正施設関係者）

★とても率直なお話を聞けて参考になりました。日々矯正の中で同じ思いを抱えながら受刑者と接していて、その問題意識をこのセミナーの中で共有できただけでも、とても心が軽くなりました。この問題は簡単な解決方法があるわけではないのですが身近に接する自分達の意識をかえ、やれるべきことをコツコツと始めていくことが大切なのかなと感じました。

（矯正施設関係者）

★塀の中の当事者が、どう考えているのか、現場の状況が認知できてないのに、最終的に厚生労働省、法務省にプログラムをまかせるのは机上の考えではないか。でも、ダルクの話、近藤さんの話には興味を考じた。塀の中の現場としてどうすれば本当はいいのだろうか。難しい。

（矯正施設関係者）

★日頃勤務をしていて感じている矛盾を整理することができました。自分自身もっと勉強が必要だと実感しました。幅広い視野を持って日々勤務していきたいと思います。

行政・保護・福祉がうまくつながっていければ・・・と思います。

社会復帰が困難なことは目の当たりにしているので。

（矯正施設関係者）

★「保護司」をボランティアでやっているので、本日の山本氏、近藤氏のお話での満期で出所する薬物依存者、障害者、高齢者（引受人がいないので満期）の話が印象的である。本来の更生保護施設＝生活保護費を充当しながらの満期出所者の生活の場。が欲しい！！

（保護司）

今我々がなすべきことはなにか

累犯障害者や累犯薬物依存者は、今我々がこうして議論しているその時も、刑務所で、あるいは社会で、支援の手を必要としている。特別な処遇メニューや処遇ユニットの新設も無論必要であるが、彼らに関わる援助専門職１人１人が、福祉的な視点を持ってアセスメントを行い、ニーズを確実に拾い上げ、必要な支援に確実にリンゲージ（連結）していくという意識の向上こそが必要であると、今回の司会を行って強く実感した。そして、累犯障害者や累犯薬物依存者と呼ばれる人々を社会から排除するのではなく、共に社会のなかで支えあって生きていくことを、市民１人１人が意識していかねばならないであろう。

薬物依存電話相談

毎週土曜日　午後３時～７時

０６－６３２０－１１９６

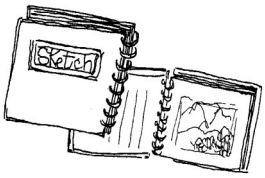
薬物依存に苦しむ人のための相談窓口です。相談者の秘密は厳守します。相談内容に応じて、各種プログラムをご紹介します。

薬物依存症Andersonの物語

薬の作用

Part9

部屋の窓を見ると、外は暗く夜だった。耐熱試験管を八センチぐらいにカットしてタバコ一本サイズのアルミパイプをヤスリで削り、サンドペーパーで磨く。薬の吸引器具の製作に没頭していた。ふと窓を見ると、外は明るかった。また器具作りに没頭していると、窓の外は暗かった。覚せい剤を大量に摂取しながら四～五日間寝ずに作業に没頭していたのだった。時間の感覚がおかしくなっていた。薬の作用で一日が一時間ぐらいにしか感じないのだ。「スピード」と呼ばれる由縁なのかも知れない。そしてその後、薬理効果が薄れると、二日間ぐらい「超爆睡」。目が開いても「ここはどこ？」「わたしは誰？」「今はいつごろ？」「どういう事？」訳解らん状態で一点をみたまま長い時間ほんの少しずつ意識が回復するのを待つ。「・・・そうや、寝てたんや」と思い出す。なんとか身体を起こす。次にやってくるのが、とんでもない倦怠感。身体全体、自分の周囲の空気でさえ、とてつもなく重く感じる。そして空腹感が襲ってくる。飢えたオオカミがヨダレを垂らしながら獲物をむさぼり食うかのように、ご飯を丼鉢三杯ぐらいは「ぺろり」と飲み込むように食べる。



その次に相変わらずの倦怠感を取り除くのに薬を使う。すると一瞬で倦怠感を感じなくなる。それと同時に意識がはっきり醒める。乱用を越えた強迫的使用だ。薬を仕入れに行ったついでに、２ショットダイヤルに電話をして難波の歌舞伎座のまえで女の子と待ち合わせをしてみたりもした。たまに薬が手に入らない時は行きつけのラウンジに行って大好きなブランデーのヘネシー（赤ヘネ）をロックでガブ飲みした。デレデレにアルコールで酔っ払っていても覚せい剤を使うと、一瞬で酔いが醒める。覚せい剤を使いながらアルコールを飲むと、ほとんど酔わない。いくらでも飲める。こんな事を何度繰り返しただろうか、わからない。このような強迫的薬物使用は身体は勿論の事、特に脳にとっては、内部的にものすごい衝撃を与えている。心臓への負担も多大だ。今そんな影響を考えると実に恐ろしいのだが、当時の僕は生きづらさの行き詰まりを迎えていて、薬物使用によって少しずつ自殺する事を選んでいた。

ひどくなった精神症状

そして、とうとう自分を見失った。自分が自分でなくなる。意

識の中に自分がいない。究極の精神の混乱がやってきた。ほんの少し現れた正気な僕が感じたのは、これまでにない限界だった。「ほんまに、もうアカン」そう感じた。そしてＮＡに駆け込んだ。何度か顔を合わせただけの仲間がやけに懐かしく思えて。嬉しかった。続けてミーティングに参加するうちに追跡妄想に支配された。僻地にある田舎の僕の家まで仲間がついてくる。家までは入ってこないが。当時の僕は「付いてくるなよ・・・」と思うものの誰にも言えなかった。

　マイカーで普通に往復すれば二時間もかからないのにミーティングの帰りは「付いてくる仲間を、マイテやる」と路地をクネクネ走ったり、わざと山間部の中を走ったりして三時間近く走りまわって自宅に帰った。それでも仲間は全員ついてきて自宅の裏山から「おーい！」「おーい！」と叫びだした。終いには戦国時代の合戦のように「わー！」「わーー！！」とうるさい。妄想と幻聴だった。それでも、ミーティングには参加した。そして次第に幻聴はなくなった。その頃の僕はミーティングに行くのは必ずスーツを着て行った。紫色や縦じまの上着のジャケットは袖を通さず、はおるだけでサングラスを掛けて髪の毛はムースで「ピチット」オールバックにして・・・「どチンピラ」ファッションと言おうか・・・、それとマイカーの音楽は目いっぱいボリュームを上げて鳥羽一郎の曲や「ど演歌」をかけていた。当時の僕を知る仲間といまだに笑い話をする事がある。

大阪ダルク

　ある仲間に僕のこれまでの経緯を話していた。「大阪ダルクは電話がつながらなかった。本当にあるのか？」と言ったら「あるよ、もしよかったら明日案内しようか？」と快く言ってくれた。次の日初めて大阪ダルクを訪ねた。大阪府高槻市寿町の富田駅から徒歩では三〇分ぐらいの所にある二階建ての長屋だった。リサイクルショップとクリーニング店の間にあった。中に入ると家庭用の食卓テーブルを囲んで椅子が置いてあった。第一印象は「狭い、なんやここ・・・」だった。薄暗い階段を登って二階に上がると、びっくりした、真黒の顔中ピアスで髪の毛が七色の変な人がロッキングチェアーに座ってテレビを見ていたのだ。鋭い目でギロっと睨まれた。「こんにちは」と挨拶をしたら、また睨まれた。「なんやねん、こいつ・・・何者や？怖いやんけ・・・挨拶ぐらいせえよ・・・」と思った。二間しかない別の部屋の押入れは襖を外してあり、その押入れは書類が散乱していて事務机の代わりになっていた。事務所スペースは狭っ苦しい四畳半ぐらいしかなかった。そこで「めばさん」が雑談のような面談をしてくれた。「よかったら、またダルクに来ればいいじゃん・・・またおいで」そう言ってくれた。なんだかすごく嬉しかった。すると「ドン、ドン、ドン」と地響きがして「ドどドどド・・・」と重たく壁が鳴りだした。「なんじゃ！ここは・・・？」その地響きは隣のクリーニング店からで機械の振動だった。それからは昼二時から始まるダルクミーティングに参加するようになった。しばらく通所して、たまに起こる地響きにも慣れだした。

　三日ダルクに行って、三日休む。二日程行っては一週間休む。睡眠障害で朝起きられないからだ。僻地の田舎にある僕の自宅から当時の大阪ダルクへは山間部の山道を通って行く事が多かっ

た。途中の道路で分岐点に差し掛かり、右に曲がれば「高槻」でダルクに向かう。左に曲がれば「亀岡」だった。ダルクに行く事が嫌な時は左に曲がって衝動的に福井県の若狭湾まで海を見に行ったりもしたが、何故か夜のＮＡにだけはちょくちょく行っていた。今思うと、当時の僕の体は薬物の強迫的使用で疲れきっていた。壊れた頭では昼二時からのミーティングにさえ満足に出れなかったのだった。精神病院へ入院をして処方薬の助けが必要な状態だった。

リハビリ放棄

ダルクに行ったり行かなかったり。そんな事が半年も続いただろうか、多額の借金が気になりだした。というのも自宅に消費者金融から郵便で督促状が山のように届き、返済の催促の電話が「ジャンジャン」鳴る。

「何とかしたい！・・・が、何ともならん。・・・どないしょう・・・」電話の着信音でノイローゼ気味になっていた。その音やそんな状況から逃げるように大阪ダルクに行った。二階でめばさんと「借金の催促で気が狂いそうです」と話しをしていたらダルクの電話が鳴った。

「うわぁ～」僕は耳を塞いでうずくまりそうになった。自宅の電話機とダルクの電話機が同機種だったのだ。「もう、ええ加減にしてくれ！」と叫びたい心境だった。そんな事もあり、継続してダルクに行けない自分が嫌になっていた。誰にも相談せず自分だけの考えで「借金返済」を優先したほうがいいと決めた。

急遽知り合いの運送屋に頼み込みアルバイトを始めた。早朝七時に仕事が始まる。夕方五時ぐらいに仕事は終わる。そして、仕事が終わると「お疲れ様」と事務所に～よ～く冷えた缶ビール～が出てきた。「アルコールも止めたほうがいい」そう思い「帰ります」と数日はすぐ自宅に帰った。何日かして社長が知り合いというのもあり「なんや、あれだけ好きやのに・・・ほい」と缶ビールを手渡された。気が付いたら五本は飲んでいた。

「まあ、ええか。ちょっとぐらい」「覚せい剤は使っていないから良い」それも自分の勝手な理由づけだった。「アルコールを飲んだら覚せい剤を使いたくなる」それも全然なかった。それからは「アルコールは大丈夫」そう思って仕事が終わると毎日飲んだ。時には得意先で昼食をごちそうになってアルコールまでおよばれした。そしてトラックを運転して荷物を運んだ。そんな状態でも時々はＮＡに参加する日もあったが、アルコール臭の吐息を吐きながら「素面はいいですね」という始末だった。そんな事だから次第に関西圏のＮＡには罪悪感で顔を出せなくなった。たまたまアルバイトの運送屋で名古屋まで荷物を運ぶ事が多く、「二時間程の個人的な用事」と言う事で社長に許可を得て毎週土曜日は名古屋のＮＡに顔を出していた。

そんな状態が約二年続いた頃の給料日に、何の迷いもなく覚せい剤を買いにいった。

つづく

あなたを傷つける人はここには居ないからもう安心してもいいと思うけどな、といい続けてくれました

薬物依存症になってよかった

[redacted]

大阪ダルク　まさし

こいつらアホちゃうか

僕が初めてダルクを訪れたのは今から六年程前の十七歳の時です。親に「頼むから一度行ってくれ、今後行くか行かないかは別として、見学だけでもいいから一緒に来てほしい」と何度も何度も言われ仕方なく行った記憶があります。

最初の印象は『神様・・・』とか言ってるのを聞いて「こいつらアホちゃうか、こんな事（ミーティングなど）してて薬がやめられるわけがない」と思いました。次にダルクへ行ったのは僕が二二歳になってからでした。

薬物を初めて使用したのは十六歳、季節は確か記憶では夏前でした。友人にトルエンを誘われて初めて吸引しました。「マズい」と思った記憶があります。しかし何度もやるうちに気持ちがよくなり、記憶が飛んだり、幻覚がみえたりして楽しいことがわかり、はまりだしました。そのうちトルエンの味が美味しく感じるようにもなりました。最初のうちは外でやっていましたが、いつからか家でも吸うようになりました。それをみた両親は僕を精神科に連れて行ったり、寺に連れて行ってお祓いをしたりとあらゆる手段でトルエンをやめさそうとしました。なかには五十万円もする壺を買わそうとする寺もあったみたいです。今から思うと両親は僕がトルエンを吸う事で思いつめていたのだと思います。しかし両親の思いとは裏腹に僕の薬物問題は悪化の一途をたどりました。

一年程トルエンを吸い続けた後、咳止め薬を使うようになりました。今思うと、薬物の種類を変えたと言った方が正しいと思います。最初のうちは１日１本で十分遊べていましたが日増しに量が増えていき最終的には１日２０本は飲むようになりました。お金は薬代で１日２万円必要でした。その頃僕は、犯罪まがいの仕事をしていたので、

薬代には困らず、薬を買ってもお金が貯まる、辞める必要など全くないような環境でした。しかしその仕事を辞めて貯まっていた貯金も底についた時、薬を買うお金に困りました。その時にとんでもない切れ目にあいました。禁断症状は言葉では表せないぐらい辛かったのを今でも覚えています。自分の力だけではこの切れ目を脱するのは無理だと思い両親に助けを求めました。両親はすぐに精神病院に連れて行ってくれて僕は入院を決意しました。僕が十九歳のときでした。それが１回目の底つきでした。

入院して最初の５日間ぐらいはやはりあのとんでもない切れ目に襲われました。保護室に入れられたのですが禁断症状に耐えられず暴れまくりました。そのたびに看護士が僕の尻に注射を打ちにきました。そうすると僕は５時間ぐらい眠る。そして目が覚めて、また暴れては注射を打つ、それの繰り返しでした。そしてようやく切れ目から脱け出せたような感じになり、一ヶ月程で退院しました。どんなに苦しい体験を持っても、僕は退院して１週間で薬局に咳止めを買いに行きました。買ってから飲むかどうか１時間程考えましたが、薬の力には勝てませんでした。そしてまた毎日使うようになり、薬を買う金にも困り親の金に手をつけるようになりました。親の金を盗んでは薬を買って、薬を使っては言い訳をして、毎日同じ事の繰り返しでした。そんなことをしているので親にも顔をあわせるのがしんどくなり家を飛び出しました。自分でも「また同じ事をしてるわ」と思いつつ犯罪に手をそめました。そしてまたお金を稼ぐようになり薬の量も増え、薬の種類も大麻、コカイン、ＬＳＤ、エクスタシー、リタリン、エリミンといろんなものに手を出し始めました。その中でも大麻とリタリンとエリミン、それと咳止め薬が僕のお気に入りでした。その時の僕の使い方は朝起きて咳止め薬を十五箱飲んで体を動くようにします。それから仕事にでて移動の車の中でリタリンを十発程飲み、目を覚ます。夕方になり仕事が終わると大麻を吸って仕事仲間と居酒屋に行き酒を飲みます。酒はあまり飲めませんが大麻を吸っていたのでそれなりに飲めました。それからクラブに行ってエクスタシーとエリミンを飲んで気分を上げたり下げたりして遊んで疲れたら家に帰り、また大麻を吸ってＤＶＤを見ながら眠りにつく、そんな毎日を過ごしていました。

２度目の底つき

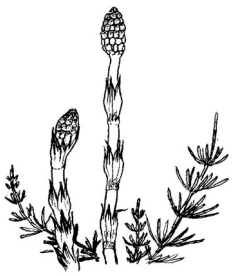
そしてある時、仕事で東京に行く事になりました。しかし東京に行ったのが間違いだったのか、大麻取締法違反で逮捕されました。その時も留置所でおかしくなり訳の分からない事を言って風邪もひいていないのに担当に風邪薬をもらっていました。担当も風邪薬さえ与えていればこいつはおとなしくしていると判断したのか毎食後と寝る前に風邪薬をもらっていました。その時東京の池袋署の薬箱に常備してあったのが咳止め薬と成分が似ているパブロンゴールドの錠剤でした。それを貯めていき今日の分、明日の分とティッシュに小分けして自分でコントロールして飲みました。拘置所に移監されると全くもらえないと解かっていたので、切れ目が急激にこないように少しずつ量も減らしていきました。そして拘置所に移されました。拘置所に移った時は留置所と待遇が全然違うのに驚きと戸惑いを隠せませんでした。拘置所で薬の切れ目と環境の悪さ、それに怒りがこみ上げてきて自分が何故ここにいるのかもわからなくなり独り言などを喋るようになりました。妄想と想像を膨らまして一人で笑ったり怒ったりして感情さえも抑える事ができなくなり、ぶっ壊れたと思いました。２度目の底つきでした。

それから裁判を受けて執行猶予の判決をもらい実家に戻りました。そのときも親がわざわざ東京まで迎えにきてくれました。実家に戻ると最初の一ヶ月はおとなしくしていたのですが次第に面白くなくなってきて薬局に走りました。それからはまた以前と同じで薬でどうしようもなくなりました。やはり結果は同じで執行猶予中にもかかわらず再犯を犯し刑務所に行く事になりました。刑務所の中で死にたくなりタオルを首に巻きつけて自殺も試みましたが死ぬ事はできませんでした。刑務所の中の生活は食事以外の時は毛布をかぶって寝ていました。刑務所の中では横になって寝る事は許されていませんが僕は勝手に横になって寝ていました。最初のうちは横になるたびに担当が５人程きて部屋の扉をあけて『作業せーへんにゃったら座っとけ』と無理やり僕を起こしにきますが担当が出て行くとまたすぐに寝るのです。そしたらまた担当が怒りにきます。起こしに来た時だけ起きて居なくなったら寝る、の繰り返しをしていたら担当も諦めたのか何も言わなくなりました。

二度と実家に帰さない

受刑生活も残すところ２ヶ月となったと同時に突然親から手紙がきました。手紙の内容は『お前は二度と実家には戻さない、ダルクに行くなら迎えに行ってダルクまで送ってやる、それが嫌なら迎えにも行かない、もし実家に帰ってきたら保健所に通報して精神病院から二度と出られないようにする』といった内容でした。僕は行く気など全くなかったのですがダルクに行くから迎えに来てくださいと返事を書いて送りました。そして出所の当日親が迎えにきました。タバコが吸いたくなったと言ってコンビニに寄ってもらい、トイレでリタリンとエリミンを十発ずつ酒と一緒に飲みました。なぜ薬があったかというと捕まって留置所にいるときに病院から処方を出してもらっていて拘置所に行けばその薬が飲めないので保管されていて刑務所に行くときもそのまま僕の留置品として扱われたらしく出所した時に返還してくれたからでした。コンビニから出てタバコを吸い車に戻りました。そしたら親がいまからダルクに行くと言いだしたので僕は「やっぱり行かへん」と言いました。そしたら親は「じゃあ今すぐ車から降りろ」と言いました。僕はもう二度と刑務所など行きたくなかったので以前の仕事をする気はありませんでした。だから渋々ダルクに行く事になったのです。

ダルクに着いてスタッフと面談をしました。親の意向はダルクに入寮してもらうということで話を進めていたのですが僕は入寮する事を拒み続けました。そこでも嘘八百をならべて実家からダルクに通所するから家に入れてくれと頼んでいたのですが親は絶対に家には入れないの一点張りで話が先に進みませんでした。僕と親との押し問答はスタッフを巻き込んで２時間続きました。しびれをきらしたのか１人のスタッフが僕を外に呼びました。その人は入寮施設の代表でした。表でタバコを一服して「とりあえず親には入寮すると言っといて嫌になったらすぐに出ればいいじゃない」と言いました。僕はなぜそう言ったのかは覚えていないですが「じゃあそうします」と答えて入寮する事にしました。今から思うとそのスタッフとの出会いは人生の分岐点だったと思います。



ダルクに入寮して一ヶ月位経った時その時一緒に入寮していたメンバーが酒を飲もうと誘って

きました。僕は自分のクリーンなどどうでもよかったので「飲もか」って答えました。そして地下鉄の梅田で降りて地上につながってる階段の隅っこで酒を飲みました。ダルクのプログラムにつながって初めてのリラプス（再発）でした。

おみやげ、よろぴく

寮に酒を持ち込み施設の中でも飲みました。その時の自分を振り返ると何をするのにも『自覚』が足りなかったものと考えています。それから一緒に酒を飲んだ仲間がおかしくなり入院しました。それから二ヶ月、薬も酒も止まりました。しかし新しい仲間が入寮してきてその仲間とまた一緒に今度はシンナーを吸いました。彼の知っている塗料店に4リットル入のトルエンを一緒に買いに行きました。その塗料店は誰にでも売るらしいのでいまだに「こんな塗料屋があるんやなぁ」と思いまた買いに来ようと思いました。そして施設に持ち込んで一緒に吸いました。それがスタッフに見つかり僕は埼玉ダルクにもう一人は北九州ダルクへ1週間『おしおき』として行く事になりました。行くのは嫌でしたが退寮になるよりかはマシだと思ったので行きますと言った記憶があります。埼玉へ行ってから施設長に公衆電話から電話をかけました。僕は「帰りたい」と言いましたが、施設長は「おみやげよろぴくー、がんばってねー」とそれだけいうと電話は(ツーツー)ときれました。

埼玉から帰ってきてもその仲間と施設内で、やりたい放題のルール違反を繰り返しました。朝ダルクに行って生活費をもらうと勝手に寮に帰って寝たりパチンコに行ったりキャバクラに行ったりしていました。施設のルールも守らない、プログラムに真剣に取り組んでいる仲間やスタッフの気持ちも考えない、自分の欲ばかりを満たしていました。あげくのはてには一人暮らしをさせろとスタッフに言い出しました。施設の代表は最初は「絶対ダメ」の一点張りでしたがしつこく言ってると最終的には通所をつづけることで一人暮らしの許可を出してくれました。

施設長が一人暮らしをするにあたって『何かしてほしい事とかある？』と僕に聞きました。僕は携帯電話がほしいといいました。それと、もし薬を使って一人暮らしができないと思ったらまた再入寮させてくださいとも言いました。そしたら『わかったよ』と一言だけ言ってくれました。

はじまったクリーン

そして1人暮らしを始めたのですがやはりうまくいく筈がなく初日に酒を飲みました。

三日間寝酒をしていました。四日目にメールで酒が止まらんから一泊だけ寮に泊めてくれと言ったら快く『その行動は良い事ね、居たいだけ居なさい』と言ってくれて一泊だけ泊めてもらい酒が止まりました。しかしそれからもエリミンを仲間からもらってクラブに遊びに行ったり酒もたまに飲んだりして断続的にスリップしていました。でもその度にメールでスリップしましたと言っていました。それを見かねたのか施設長が『あんたはこれから私達と一緒に行動しなさい』と言いました。そこから僕のクリーンが始まりました。朝起きてクリーンタイムの長い仲間と待ち合わせして一緒にダルクへ行きます。ミーティングを受けダルクから出て今度は一緒に自助グループ（ＮＡ）に

向かいます。ＮＡが終わると、どこかで話をしたりご飯を食べに行ったりして自分の家に帰ります。僕にとってはＮＡから帰ってからが問題だったので一緒にいてもらうことはものすごく有り難い事でした。そのうち自分でも気づかないうちにクリーンが続いていました。

そしてクリーン三ヶ月目で二つのナイトケアの手伝いをする事になりました。一つは以前僕が入寮していた施設ともう一つは女性のケアホームです。仕事が与えられてすごく嬉しかったです。何よりも嬉しかったのがやはり施設の仕事ができるということでした。仕事と言っても簡単なもので消耗品を施設に届けたり書類を整理したり施設で問題が起こったら見に行ったりと普通の会社でいえば雑用というものです。給料はありませんがそのかわりクリーンがもてました。僕は人に対して甘える事ができなかったのですが『甘える』ということも施設長はじめ、クリーンの長い人に体験させてもらった気がします。

そして現在の自分はというと非常勤スタッフとしてダルクにいさせてもらっています。そのかたわらナイトケアの雑用（笑）も兼任しています。

ダルクにつながってプログラムを通してたくさんの出会いがありました。その中で仲間が亡くなったりもして辛い別れもありました。しかしそういった経験の中で先に書いた『自覚』というものも芽生えだしてきました。自分もほんの少しですが「成長したんやなぁ」と思ったりもします。自分のなかでは回復とは永遠に続くと考えていますので僕の回復はまだまだ発展途上中でスタートし始めたばかりなのでしょう。そして今はたくさんの仲間に囲まれて楽しくやっています。自分がこれから先どうなっていくか分かりませんが今のこの自分を大切にしたいと考えています。僕は二二歳でダルクへ親に連れて行かれ、渋々入寮しました。ダルクは薬物をやめる場所だと思っていたので、初めて行ったときはやめる気などなかったのでいく必要などないと考えていました。入寮中は薬物をやめない僕を施設長は見切りをつけるだろうと思っていました。でも薬物を使う僕を追い立てる事は一度もなく、いつも（あなたを傷つける人はここには居ないからもう安心してもいいと思うけどなー。）といいつづけてくれました。施設長との出会いは僕の人生が薬物なしで『しらふ』で生きる事のきっかけとなりました。

『薬物依存症になってよかったなぁ』と最近おもえるようになってきました。

（完）

二〇〇〇年十二月十二日 第三種郵便物認可　毎日発行

発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市城東区東中浜２－１０－１３ 緑橋グリーンハイツ
編集人　フリーダム　谷口伊三美 isami.taniguchi@nifty.ne.jp
大阪市東淀川区下新庄２丁目４番６号　０６－６３２０－１４６３
頒価　1部３５０円
薬物電話相談　０６－６３２０－１１９６（土曜日午後３時～７時）
寄付・会費は同封の振替用紙を利用いただくか、下記の口座へ
三井住友銀行　西田辺支店　　普通：６７３９５１２
フリーダム　理事長　山本眞（フリーダム　リジチョウ　ヤマモトマコト）